

## 経済学形成期における労働観の変化

生越利昭

## 1) はじめに

17世紀から18世紀後半に至る経済学形成期において、労働観は大きな転換を遂げた。それは第一に、怠惰な労働者を勤勉に働かせるための低賃金経済論から、勤勉な労働者を前提とする高賃金経済論への転換であり、第二に、自然のものを受け取るだけの受動的労働観から、剰余価値を生み出す創造的労働観への転換であり、これはスミスにおける労働価値論の成立につながる。本報告では、特に第二の問題に焦点を当てる。

水田洋(1954)『近代人の形成—近代社会観成立史』が示したように、ホブズの状態が戦争状態にならざるをえないのは「労働による生産」に対する低い評価にあった。ホブズにおいては、労働は「ものを作るのではなく、与えられたものを受け取る」程度の受動的なものとして捉えられた。このような受動的労働観を克服したのは、ジョン・ロックの労働による所有の理論である。ロックにおいて、労働投下が財貨の価値を生み出すという労働=生産概念が前面に出された。

このような労働観の転換は、その後の思想展開にとって決定的に重要である。この労働=生産概念は、人間自らが経済的価値を生み出すことによって自然から自立し、余剰=富を蓄積し、経済発展を実現する可能性を示す。この問題は、経済学形成過程を理解するための核心的テーマである。

この問題を明確に意識し、それを一貫して研究に活かしてきたのは、故小林昇教授の研究であろう。小林(1961)『経済学の形成時代』や小林(1973)『国富論体系の成立』を始め、小林(1994)『最初の経済学体系』などは、この問題を真正面に据え、ウィリアム・ペティを起点にスミスに至るまでの経済学形成史を一貫して解明している。本論は、故小林教授の研究成果を再確認しつつ、原点に返って、改めてスミスに至る経済学形成期の労働=生産思想の展開過程を概観する試みである。

この問題に取り組む際には、次のような分析視角が重要である。ロックが創造的労働観を提示したとき、彼が想定した労働者は独立自由な生産者であった。この線上で、独立生産者による価値の生産、それによる富の蓄積が経済世界を独立させ、それを前提にして経済世界に固有の法則を分析する経済学が成立する。しかし、それは他方で、原始的蓄積によって達成された資本=賃労働関係に基づく資本主義体制の問題とつながっている。資本主義の側面から見れば、労働とは資本に雇用された賃労働者のそれであり、富とは資本主義的雇用体制によって生み出された剰余価値=利潤の蓄積形態なのである。スミス経済学における労働価値論や三階級三分配関係および「生産的労働」概念は、この側面と関わる。そこで、経済学形成期の労働=生産思想を究明する際には、労働の担い手が「独立生産者」なのか、「賃労働者」なのか、を明確に区別しなければならない。本論は、個々の思想家における両者の錯綜した関係を解明し、その展開過程を明らかにすることを目的とする。

## 2) ペティからハチスンまでの労働観の変遷

最初に、18世紀半ばまでの主要な思想家の労働観を概略的に整理し、そこに自由な生産者の価値創造的労働の考え方が定着していくことを確認する。

ペティ(William Petty, 1623-87)は、商品の価値の源泉が労働であり、その交換価値(交換比率)が投下労働量=労働時間によって測られるという労働価値論を認識した点で、「経済学の創始者」と呼ばれる。しかし、そこには土地と労働の二元的価値源泉論があり、それが労働価値論の精緻な分析を妨げた、と評価される。また、彼は労働者を、貧困状態にしておかないと働こうとしない怠惰な人間とみており、生存費賃金説に基づく低賃金経済論を展開した。それゆえ、労働は価値の源泉ではあるが、それは賃金を得るために行われる被強制的・受動的な活動とみなされた。

ロック(John Locke, 1632-1704)は、労働を創造的生産活動として捉えることによって、労働観の転換を画した。自由な独立生産者の主体的な労働は、各人に固有の「生命・身体・自由・財産に対する自然権」=「固有性 property」に立脚し、人格 person のモノに対する支配としての「自己所有権 self ownership」概念の基盤となる。これは、労働を神によって課された義務と考えるキリスト教的労働観とも融合して、創造活動としての労働を基盤に自由に主体的に生きる近代的個人=「工作人 Homo Faber」の人間像を描出し、さらに、全人格の自由な活動=生命活動を表している。しかし、彼にはこれと異なる貧民教育・雇用論がある。それは怠惰な労働貧民を半強制的に「労役場」等に収容し、矯正・訓練して勤勉な労働者に仕立て上げ、産業界の雇用増進を図る政策提言であった。そこには、賃金労働者による価値(商品)の生産(資本主義的な剰余価値生産)が視野に入ってきているが、ロックはこれを十分に認識しておらず、それを「生産者」として一括し、一般的な生産=労働概念の中で理解していた。

『蜂の寓話—私悪は公益』の著者マンデヴィル(Bernard Mandeville, 1670-1733)も、労働が富を生み出すという認識を前提にしていた。その労働に「刻苦 diligence」と「勤労 industry」との違いを認め、前者は雇用された労働貧民の受け身の労働であるのに対し、後者は大きな欲望・野心に動かされた創意工夫を意味する。前者が賃金労働者、後者が進取の気性に富んだ生産者層や事業家に対応するが、ここでは、両者が協力して分業体制を整えることが、富=剰余の基盤となると主張されている。その一方で、労働は本来苦痛で人間は生来怠惰であるから、労働者を低賃金によって否応なく働かざるを得ない状態におくべきという低賃金経済論が、彼の労働観の基底になっていた。

経済認識の転換を示す「高賃金経済論」を明示したデフォー(Daniel Defoe, c.1660-1731)も、労働が富を生み出すという認識を共有し、「労働は利得を生み、利得は労働に力を与える」と明言している(Defoe (1728) *A Plan of the English Commerce*, p.36. 訳 47頁)。そして、トレイドを担う人びととして、勤労者 working men、手工業者 handicrafts、親方職人、商人の四階層を挙げ、それらの階層の密接な分業関係により国民経済が発展することを示した。ここには、賃金労働の認識はあるものの、賃金労働者も独立生産者層(商人、

職人、製造業者を一括した)の中に組み入れられ、資本・賃労働関係についての詳細な認識には至っていない。彼も、一般的な生産者層の労働＝生産から富が生まれるという認識を基礎に国民経済発展の問題を考察していたのである。

ハチスン(Francis Hutcheson, 1694-1746)は、「勤労 industry は富の自然の鉱山である」と明言し、安価な労働が安価な商品を生産し、国際貿易を有利にして「富と力」を増大するという、低賃金経済論を展開している。労働＝生産の担い手としては、商人、職人・製造業者、農業経営者が想定され、賃金労働者は彼等の召使いとして表現されており、家族的生産関係の中に一体として組み入れられて理解されている。ここでは、雇用主も賃金労働者も共に、自ら労働して剰余を生み出す生産者として描かれ、そこから生み出される剰余＝利潤は、「彼らの労働の正当な報酬」「労働やサービスが財に付加した追加的価格」と表現されている(Hutcheson (1755), *System, in Works*, vol.6, pp.63-4, 319-20, 259-60.)。

### 3) ヒュームの労働観

ヒューム(David Hume, 1717-76)の経済論がまとめて発表されたのは『政治論集(*Political Discourses*)』(1752年)においてである。それは、「勤労 industry、知識 knowledge、人間性 humanity は不可分の連鎖で結ばれている」という著名な表現によって(Hume(1752), p.23. 訳 22 頁)、人びとの相互依存関係が文明社会および経済発展の原動力であることを明確に提示し、「勤労」が、剰余を生み出す労働であることを明示している。

ヒュームは、農工分離過程が近代的経済発展の基点になるという基本認識から出発する。農業労働によって剰余が生まれ、それと交換する製造品を加工する製造業が生まれて社会的分業関係が成立したときに初めて、経済発展が可能となる。ここでは、農業、製造業、商業が相互に連携し合うことによって国富形成に貢献するという見解が示されている。この三部門に従事する人びとは自らの労働によって剰余を生み出すから、それらは「勤勉な職業」なのであって、そこから生まれる剰余生産物(財貨の増加と消費)は「労働の貯え」や「一種の労働の貯蔵所」と表現されている(Ibid. pp. 12, 24. 訳 12, 23 頁)。ここで明らかのように、ヒュームは、剰余価値＝富を生み出す源泉が「勤勉な職業」に従事する人びとの「労働 labour＝勤労 industry」であること、そうした勤勉な人びとの間の社会的分業＝協力関係に注目した。その意味で、ヒュームにとって「勤労」の担い手は、農民、製造業者、商人の三階級であって、彼らは独立生産者として一括して理解されているのである。

ヒュームは、これら三階級と賃金労働者とを明確に区別してはいない。「労働者 labourer」という語は、農民、製造業者＝職人、商人にも適用され、生産者と同義に使われている。これらの労働者＝生産者の富裕化＝「貧者の幸福」の増大を目指し、「できることなら各人は、すべての生活必需品と多くの生活便益品とを十分にもつことによって、自分の労働の成果を享受すべきである」ということが基本前提とされる。

ヒュームは、勤勉を含むすべての活動の中に楽しみを見出している。「勤労と諸技術とが栄えている時代には、人びとは絶えず仕事に従事し、労働の果実である快樂だけでなく、

仕事自体をもその報酬として享受する。精神は新しい活力を獲得し、その力と能力を増大する。そして実直な勤労に精励することによって自然の欲望を満足させるだけでなく、安易と怠惰とに養われた際に通常生じる不自然な欲望の成長をも妨げる。」ここでは、産業が発展している社会で仕事に従事する活動的人間は、仕事それ自体を楽しみ、技術を洗練させるための知識の習得に励む。こうして「極度の無知はすっかり駆逐され、人びとは理性的動物の特権を享受して、活動するだけでなく思索も行い、身体の快樂だけでなく精神の快樂をも求めるようになる」(Ibid.pp.21-2. 訳 21-2 頁)。このように、ヒュームは明確に、労働を苦痛として否定的・忌避的に捉える労働観から脱却し、労働を生活の一部として肯定し、労働すること自体が幸福の重要な要素を成すという積極的肯定的労働観を表明する。それは彼の追求した「勤労と知識と人間性の結合」を実現する本質的契機なのであった。

#### 4) J. スチュアートの労働観

スチュアートは『原理』の初めで、近代社会における自由民の「勤労」による剰余生産、それによる農工分離、人口増殖の可能性を提示している。農工分離によって成立する分業と交換の社会は、必然的に二つの階級に分かれる。一方は生活資料を生産する農業者 farmer の階級であり、他方は新たに登場した非農業人口＝「フリー・ハンズ Free hands」の階級である。このフリー・ハンズの職業は、農業者の余剰と社会の欲望に依存してさまざまである。スチュアートは、第 2 編において、農工分離に基づく近代社会を実現する自由な労働を「勤労 industry」と呼び、奴隷労働および自活のための私的労働である単なる「労働 labour」と区別している。勤労は「自由な人間によって行われる創意ある労働 ingenious labour」と定義され、剰余を生み出す創造的労働を意味している(*Principles of Political Economy*, I -224. 訳 1 巻 156 頁)。この勤労による剰余生産に基づく社会発展という論理は、ヒュームの継承であるが、そこにはヒュームと対立するスチュアート固有の観点が示されている。それは、為政者 statesman の重要な役割の認識である。自由な農業労働から産出される剰余を、貧民の生活資料として配分するために、為政者は「相互的な欲望」を創出し、「剰余に対する販路」を準備しなければならない。

スチュアートは、農業生産物がどのように費用分割され配分されるかを論じる際、「農業者やその家族や使用人の栄養物」と一括して表現している(I-55. 訳 1 巻 39 頁)。これは、農業者と家族以外に、使用人 servant が雇われていることを意味し、必要経費の中に彼らの賃金、さらに「臨時雇いの労働者の報酬」が含まれていることから、農業者が完全な独立生産者というより、労働者を雇用する資本家的農業経営者の性質を備えたものであったことを示している。この費用項目にはさらに農業者の「適正な利潤 profit」が上がっており、その費用項目は、①生活費(賃金)、②生産手段の経費、③利潤から構成され、資本家的経営の費用項目の様相を呈している。

しかしながら、農業者の労働者雇用は、自らの勤労では十分な生産ができない農業者家族の補助的役割を担うものであって、農業者が自らは労働せず、賃金労働者の労働に全面

的に依存する完全な資本主義的経営者になっているわけではない。賃金労働は家族労働の域を出るものでなく、農業者は、一部に賃金労働者を雇用する農業経営者の性格を帯びた独立生産者としての特徴を持ち続けているのである。

製造業の場合にも、生産手段をもたないため「他人のために働かざるを得ない職人」が存在し、フリー・ハンズは2つに区分される。「剰余を直接に所持する人々、または、すでに獲得された貨幣収入で剰余を購入することができる人々」が第1の部類であり、「自分たちの日々の労働もしくは個人的な奉仕によって剰余を購入する人々」が第2の部類である（I-63. 訳1巻44頁）。第1の部類の人々は、その資金を投じてどこかに製造業を設立する資本家的経営者であり、第2の部類の人々は、その製造地で働くために、第1の部類の人々について行かなければならない労働者である。

しかし、このような雇用関係を、スチュアートは純粋な資本主義的関係とはみなさず、雇い主の親方と雇い職人との間に相互利益の共有が成立するとみている。すなわち、「親方は、自分の雇い職人の利潤の分け前にあずかることによって、みずからの利潤を大いに増大させる。」それは彼らに「分け前にあずかる正当な権利がある」からであり、また雇い職人も、「自分たちの技量に見合った利潤とともに、その生理的<sup>1)</sup>必要物を確実に獲得できるので、進んで自分の親方と分け合うようになる」（I-421. 訳1巻289頁）。また「勤勉な自由人はおのれを雇うものの利潤にあずかるに相違ないのであるが、奴隷がその主人に求めるのは生活資料だけである」として、職人が「自分の仕事の価値に比例した賃金を強く求める」のは、自由人として当然の要求であると言っている（II-202. 訳1巻441頁）。

このように、賃金労働者として雇われている労働であっても、それは自由な「勤労」として営まれ、自らの労働の報酬を一部でも「剰余」として自らの手元に残すことができる。それが近代的な自由な勤労の特質であり、奴隷のような強制的労働と根本的に異なる。この区別は、スチュアートが最も強調したかった点であろう。

## 5) スミスの労働観

スミスの経済学体系は、労働による剰余価値の産出が富の源泉であることを明らかにし、資本=賃労働関係に基づく資本蓄積の構造を解明した点において、近代資本主義の経済学と呼ぶに相応しい。しかし、スミスの分業と交換を基盤とする「商業社会」概念は、独立生産者からなる等質的な社会の様相を呈し、労働者階級と資本家階級の雇用関係を基軸とする資本主義社会概念とは異質である。商業社会の担い手は、自らの労働を自然の事物に加え価値を創造する労働者であるとともに、自らの生産物の所有者であり、それを消費した後に残る「自分自身の労働生産物の余剰部分 surplus part」を「他人の労働生産物の余剰分」と交換するのであって（*WN*, I -ii. p.28. 訳1巻40頁）、市場において商品を相互交換する「商人」の性格をもつのである。しかし、商業社会は、スミスの発展段階論では第四の「文明社会」段階に当たり、労働する者と所有する者が分離する不平等社会のはずであり、独立生産者だけからなる社会ではありえない。この問題をスミスはどのように理解していたの

であろうか。結論を先取りすれば、商業社会は、資本主義社会の三階級三分配関係の中に見出される対等な相互交換関係と協力関係を象徴的に（別の見方をすれば、擬制的に）表現した抽象概念であった。これは彼の労働観と密接に関係する。

スミスは、労働が富を生み出す基盤であるとともに、報酬を得る手段であることを強調し、労働が物を獲得するために支払われる費用=苦痛であるという見解を示す。それは「あらゆるものがそれを獲得したいと思う人に真に負担させるのは、それを獲得するうえでの労苦と手数 *toil and trouble* である」という表現に見られる(I -v, p.47. 訳1巻63頁)。そして「だれでも自分自身のなかにもっている財産(*property*)は、他のすべての財産の本源的な基礎であるように、もっとも神聖・不可侵な財産でもある」(I .x.c.p.138. 訳1巻215頁)という周知の表現は、労働生産物に対する所有ではなく、労働それ自身に対する所有を主張するためのものであった。ここから、労働を他人に販売して報酬(賃金)を得ること、労働が一個の商品として自由に販売・購買されることが、必然的結果として導出される。こうして、「自分の労働によってしか生きられない者」は賃金労働者になるべく、労働の所有者=販売者として市場に登場し、資本の所有者(資本家)や土地の所有者(地主)と同様に、一個の私有財産所有者として対等な関係において取引を行う。スミスによれば、賃金労働者も相互交換関係に対等に参加する限り、「商人」としての性格をもち、商業社会の一員たりうるのである。

スミスは、労働の「楽しみ」を、ヒュームのように自己の能力を最大限に発揮し開発する自由な創造活動の中に求めることはせず、端的に労働の報酬を獲得するという成果(*sweets*)にのみ求めている。彼にとって、スチュアートが強調したような勤労 *industry* と労働 *labour* との区別、自由な労働と強制された労働との区別の問題は、大きな関心にはならなかった。彼にとって重要なのは、労働による成果=剰余価値の生産であり、それを効率的に行うための勤勉の問題であり、さらに人びとを勤勉に導く高賃金や労働条件の問題だった。それは、労働を手段とする「富裕化の論理」を基軸としている。

また、スミスの資本・賃労働関係や三階級三分配関係の認識は、あくまで機能分析上の概念化であって、資本機能と労働=生産機能とは、現実の担い手の中で複雑に絡み合い、三階級が純粋な形で存在するわけではなかった。労働者も独立生産者になりうるし、独立生産者が労働の成果を蓄積しつつ、その資材によって労働者を雇い親方資本家にもなりうるものであり、三階級三分配社会といっても、そこでは労働者も独立生産者も親方資本家も入り混じって活動しているのである。それゆえ、スミスが「商業社会」を独立生産者の活動によって象徴的に表現したのは、この対等な関係を強調するためであったと思われる。

いずれにしても、スミスにとって、経済発展のカギを握るのは価値を生産する労働者=生産者であり、その境遇を改善し「一般的富裕」を実現することこそ、『国富論』の目指した目標であった。すなわち、「国民全体に衣食住を供する人びとが、彼ら自身の労働の生産物のうち、自分たちが一応十分な衣食住を得るだけの分け前にあずかることこそ、まさに公正 *equity* なのである。」(I -viii. p.96. 訳1巻142-3頁)